



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3945 号 2017.10.8 発行

海外でも論争、「優先席問題」は解決できるか ジャカルタでは乗務員が巡回して注意促す
 さかい もとみ：フリージャーナリスト 東洋経済 2017年10月08日
 「優先席を譲る、譲らないの問題」はなかなか解決が難しい（撮影：尾形文繁）



「地下鉄にね、寝ちゃった男の子を重そうに抱えたママが乗ってきたの。そうしたら、優先席に座っていた80代くらいのおじいちゃんが席を立って、ここどうぞ、って勧めていた。日本じゃあんなこと、まずないよね？」

9月のシルバーウィークにロンドンにやって来た智子さん（仮名）、一人で地下鉄に乗った時のできごとを興奮気味に話してくれた。

実はこの話、続きがある。

「そうしたら、60代くらいのおばちゃんがおじいちゃんに、ここ座ってくださいって。数秒の間に4〜5人が席を立って譲り合いながらお互いに笑って……。ほほえましい光景だったわ」

度重なるテロにおびえるロンドン。不審物などへの意識が高まるだけでなく、弱者への気配りがより進んだようにも感じる。

さて、各国の交通機関に設けられている優先席はどのような使い方をされているのだろうか？

優先席を空けておく国もある

日本では、優先席の扱いをめぐってネット上でさまざまな意見を読むことができるが、他の国でも同様に論争が繰り返されている。世界ではどんなことになっているのか調べてみた。

親日家が多く、人々の習慣や文化が比較的近い台湾の状況をみてみよう。現地で「博愛座」と呼ばれる優先席は、台北では地下鉄や公共バスに設けられている。過去には「博愛座に座っていた全盲に近い弱視の学生に対し、老婦人に『あなたが座るべきでない、席を譲れ』と罵った」「博愛座に座りたかった老人が、席に荷物が置かれていたのを見て腹を立て、その乗客ともめたあげく、持っていた飲み物をかける事態にまでエスカレートした」などの事例があったという。

この「老人が飲み物をかけて怒ったケース」はその状況がネット上に動画がアップされたことから、たちまち大きな論争になったという。そんな中、現地の弁護士は優先席の扱いに関し意見を投稿。「法律的な取り決めはなく、あくまで乗客の道徳心に委ねる形で運用されているので、人々の間で起こる意見の違いから論議が起こるのは当然」と結論が出ない問題であるとの見方を示している。

一方、アジアの中でも比較的地下鉄や近郊電車網が発達している香港ではどうだろうか？写真のように「優先座」と呼ばれ、地下鉄では1車両当たり2席から4席に増設する措置が進んでいる。

香港 MTR (地下鉄) の優先座。各車両に2~4席設けられている (写真: Mk2010/Wikimedia Commons)

現地の調査機関が学生1800人あまりを対象にアンケートを行ったところ「空いている優先席に座った時に心理的圧力を感じる」との回答は8割以上に上ったという。しかも、香港では老人が「優先席に座らせろ」と若者に主張するケースが極めて多く、今では、「世代間論争の種」という問題にまでエスカレート。批判の対象になっていることを揶揄し、「優先席でなく論争席だ」と論じる人々さえもいる。

しかも香港ではさらに陰湿なことが行われている。優先席に座っている学生などをスマホで撮影し、それをネットにさらし糾弾することもあるという。そんな中、男子学生の30%が「優先席の設置そのものをやめて欲しい」と訴えているとの結果も出ている。

ジャカルタでは強制的に立たされる

「ネットで公開批判」が行われる香港の地下鉄では、混んでいる車内で優先席が空いても誰も座らない事態が往々に起こっているという。もっとも、事情を知らない外からの観光客が座っている様子も見かけるが。

一方、係員がやって来て「座るべき優先度の高い乗客が来たら、他の乗客を立たせる」という極端な「運用」を行っているところがある。それは1000両近い日本製中古車両が走るジャカルタの近郊鉄道網(旧KCJ、9月からKCIと改名)だ。

電車や駅構内の秩序を守る「PKD」と書かれたヘルメットをかぶった男性スタッフが、随時車内を巡回。「あなたより困っている人がいます」と乗客の膝を叩き、席を変えるように促す。日本で走っていたときには車両片端だけに設けられていた優先席エリアがジャカルタで両端に設けられており、日本の習慣で車両の端の座席に優先席とは知らずに座っていた筆者は膝をPKDに叩かれ、赤ちゃんを抱いたママに席を譲ることになった。もっとも最近では、「自分より座るべき優先度の高い人」が乗ってくると自主的に立つ傾向もみられ、「PKDによる膝叩き」がなくても快く席を譲る男性客が増えているのは喜ばしいことだ。一方、ロンドンでは今年から、身体に何らかのハンディを持つ人向けに「席を譲ってください」バッジを交通局が配布している。

実際に手にできるかどうか、筆者も入手をめざしたところ、特に理由を聞かれることなく2週間ほどで現物が送られてきた。日本でも使われている「おなかに赤ちゃんがいます」と同様の意味を示す「Baby on Board」と示されたバッジは広く使われているが、残念ながら「席を譲ってくださいバッジ」を付けている人を見たことがない。

ロンドン交通局が配布している「席を譲ってください」バッジ。日本で同様のものを配ったらどんなことが起こるのだろうか？(筆者撮影)

バッジには「席を譲ってくださいカード」も同封されており、これは優先席に構わず座っている人に「どいてください！」と言わんばかりに見せつけるような用途



を想像するのだが、はたしてそんなことができる乗客はいるのだろうか？
ある種の強制力により優先席を機能させるジャカルタの例は極端とはいえ、日本で（残念ながら）日常的に起こっている「本来、優先席に座るべきであろう人がいるのに、若者がそこを占有している状況」はあまり芳しいとは思えないがどうだろうか？
訪日客たちは「東京での優先席利用状況」をみてどう感じているのか。外の人からの視点は参考になる。
訪日中に「キャリーバッグを運んでいたら、正面から僕の方に向かって人が向かってきた」という経験を話してくれたスミスさんに、「電車で何か印象的なことはなかったか？」と聞いてみた。
するとスミスさんは、「老人に誰も席を譲らないので、僕が席を立とうとしたら、しきりに No という仕草をするので逆に困った。ロンドンでは誰でも一言 Thank you と言って座るのに……」と話してくれた。

日本人の「心」が理由なのか

席を譲る、譲らないの問題は、多くの日本人が持つ「誰かに迷惑をかけてはいけない」という心が起因するのかもしれない。たとえば若者が老人に席を譲るべく声をかけようにも、「私はまだ席を譲ってもらうほど歳をとってはいない、と怒られてしまうかも」と忖度（そんたく）したりとか、お年寄りの側は「若い人は仕事で疲れているのだから座らせてあげよう。私はすぐ降りるのだから」と考えるのか、席を譲りましょうと声をかけてもひたすら遠慮されることが多いようだ。さらに座っている側の心理として「周りの誰も譲ろうとしないのだから、自分があえて席を譲るのも……（その場の平穏をあえて崩すこともない?）」と考えているのかもしれない。

なかなか結論を出すことができない「優先席のあり方」。日本人が持つある種の「気遣い」により、席を他人に譲ったり譲られたりするのなかなか勇気がいることなのだろうか。とはいえ、仮にも日本で「おもてなし」の対象としている外国人訪日客に「日本人は席を譲らない」と思われてしまうのは嘆かわしい。日本特有ともいえる極めて厳しい満員電車の通勤事情を考えると簡単に結論を導けないのがもどかしい。

幼児期の外遊びで体力向上に ストレス解消効果も浸透 共同通信 2017年10月8日



屋外で遊ぶ子どもたち=2015年、長野県安曇野市

スポーツ庁は8日、体育の日を前に、2016年度体力・運動能力調査の結果を公表した。幼児期の外遊びの頻度が高い小学生ほど、今も運動習慣が身に付いており、体力テストの合計点が高い傾向にあった。同庁は「外遊び習慣が就学後の運動習慣の基礎を培い、体力向上の要因の一つになっている」としている。20～79歳の全年代で、おおむね9割以上の人が運動やスポーツにストレス解消

効果があると感じていることも分かった。

調査は16年5～10月に実施、抽出した6～79歳の男女6万4607人の結果を集計した。体力テストでは、握力や上体起こしなど各項目の成績を10点満点に換算して合計。

インタビュー ドキュメンタリー映画「夜間もやってる保育園」大宮浩一監督「ありのまま

まを見てほしい」

毎日新聞 2017年10月9日

「夜間保育園の映画を作ってほしい」。公開中のドキュメンタリー映画「夜間もやってる保育園」は、大宮浩一監督（59）が24時間体制の認可保育園「エイビイシイ保育園」（東京都新宿区）の園長、片野清美さん（67）の手紙を受け取ったのが撮影のきっかけだった。「映画はやめた、とっていました」。前作から3年ぶりとなる作品を撮影した大宮監督の口から、意外な言葉が返ってきた。【西田佐保子】

大宮浩一監督＝西田佐保子撮影

奥さんの言葉で決意

大宮監督はこれまで、さまざまな映画に助監督やプロデューサーとして携わり、2010年、51歳のときに初監督作品「ただいま それぞれの居場所」を発表した。同映画は、介護保険制度導入から10年たった介護福祉の実情と、理想とする介護を実現するため施設・事業所を設立した若い介護スタッフたちの奮闘を描き、その2



年後には最期のみとりの場に立ち会う介護スタッフや家族の思いを映した「季節、めぐり それぞれの居場所」（12年）を企画・製作・監督した。「夜間もやってる保育園」は、14年の「石川文洋を旅する」以来の監督作品となる。

「映画をやめた、とっていました。ある程度やったから、少し距離を置いてみようかと」。ドキュメンタリー映画のある傾向についても違和感を持ち始めていた。「テーマや問題を主張しすぎる、声高になりすぎている。だから、格好良く言えば、『カメラがなくても映画はできる』、これからは自分の目で日常を見つめる、それでいいじゃないかー。カメラで記憶し、映画という商品として人に伝えることに迷いがあり、3年間、映画とは離れていました」

大宮監督の映画は、介護や保育などテーマ性が強いものの、その問題を観客に「押しつける」スタイルではない。中心にあるのは、その場で生活する人間、人と人との関係性だ。「映画から離れて、1年間はアスベストの除去作業員をして、残りの2年間は介護施設で人生初の正社員として働いていました」

そんな大宮監督のもとに、介護をテーマにした2作品を見た片野園長から「夜間保育の現状を知ってもらうために、映画を撮ってほしい」という手紙が届いた。「くすぐったさと、『寝た子を起こすなよ』という気持ちが半々でしたね。でもかみさんから、『二度寝はしない方がいいわよ』と言われて」。大宮監督は笑い、「そうか。一度起きた以上、機嫌良く起きよう」と。

介護も保育も、人を支える「ケア」

夜間保育園とは、厚生労働省の定める設置基準を満たした認可保育施設で、全国に81カ所（16年4月1日現在）あり、現在約2500人の子供たちが通っている。昼間の認可保育所は全国に2万3410カ所（17年4月現在）。なお、夜間保育所認可を受けていない夜間保育施設、いわゆる「ベビーホテル」は1579カ所（16年3月末現在）ある。



「エイビイシイ保育園」（東京都新宿区）(C) 夜間もやってる製作委員会

手紙をもらった当初は、夜間保育の知識はほとんどなかった大宮監督。「撮影を開始する前に夜間保育園に通って、そこが生活の場であることがわかりました。介護は、

家族だけでは支えられない年を重ねた人の生活をケアする。保育は、働き方や収入などの問題があって親だけでは支えられない子どもの生活をケアする。介護も保育も同じ、人を支える『ケア』だと気付きました」

そこで片野園長にこう伝えた。「撮影して、夜間保育の必要性を自分が感じられるかどうかはわかりません。映画を見て夜間保育に対して偏見を持つ人もいるかもしれない。でも、夜間保育園の存在さえ知らない人が多いなかで、まずは色眼鏡を外して、ありのままの姿を知ってもらえるような映画を作りたい」

映画では、夜間保育園の園長も保育士も「できれば夜は家族で過ごしてほしい」と話す。「僕も夜間保育園が必要とされていない社会が好きです。一方で必要とする人は存在する。今、ここで困っている人を放っておくわけにはいかない」。そして、自らが映画から距離を置いた理由とリンクさせ、「理想は分かっている。でも、理想を声高に叫ぶだけでは、むなしいですよね」

物事のポジティブな面をすくい取る

大宮監督は、介護であれば3K（きつい、汚い、危険）、夜間保育であればネグレクトといったネガティブなイメージではなく、ポジティブな面を積極的にすくい取っているようにも見える。今回の映画も、子どもに精いっぱい愛を注ぐ親や保育士、園長の姿が強く印象に残る。

「無意識ですが、もしかすると意識しているのかもしれませんが。介護であればゴールは『死』です。僕は死に至るまで、その人と付き合う家族や介護スタッフたちに興味があります。国や行政の対応しきれない役割を担っている人たちの活動を撮っているから、ポジティブになってしまうのかもしれませんがね」

これまでの大宮監督の作品を見ると、既存の枠に収まりきれない人たちに興味があるように思えるが、「それは強くあります。保育園であれば、認可が良くて無認可が悪いというイメージはありますが、そうじゃない。今回、撮影した夜間保育園も、多くは無認可ベビーホテル時代を経験しています。認可は経済的には楽だけど、おもしろくない。理想の保育を続けるには認可外でも致し方ないと、片野園長も話していました」。

千葉県花見川区にある介護施設「宅老所 いしいさん家」の代表を務める石井英寿さんは、映画「ただいま それぞれの居場所」のワンシーンで「人間とは、人生とは、家族とはなんぞやってその都度考えるうちに、自分たちが勉強になるんですね。だから（この仕事を）やっているのかな」と語る。このセリフは大宮監督が映画を撮る理由とシンクロしているのではないかと。「そのような映画を目指しているのかもしれない。そう感じてもらえたらうれしいです」

子育て世代に手を差しのべたい映画に

大宮監督は「子育てしている当事者、ご夫婦に見ていただきたい。あと、お孫さんのいるおじいさんやおばあさん、子育てが一段落したご夫婦にも映画館に足を運んでいただきたいですね。『そうそう、そういうものよ』と昔を思い出してもらったり、『最近はこのね』と思ってもらったり、そのことによって、子育てを頑張っている人たちにさまざまな形で手を差しのべられるようになってもらえたら」。そして、「夜間保育は必要だってことをわかってもらいたい」と続けた。

「寝た子を起こされた」大宮さん、今後も映画を撮り続けたいですか？

「この映画がヒットしたら考えます（笑い）。子どもを撮ることで、今の時代や社会が垣間見られるような映画を作りたいですね。でもやっぱり、カメラがなくても映画が撮れるという意識はあります。映画を通して伝えたいのか、自分の中で納得すればいいのか……」

そう語る大宮さんだが、「二度寝はしない方がいい」。この映画を見た観客も奥さんと同じ言葉を掛けたくなるだろう。

略歴

おおみや・こういち 1958年生まれ。日本大学芸術学部映画学科在学中より映像制作に参加。93年、有限会社大宮映像製作所を設立。原一男監督の「ゆきゆきて、神軍」（8

7年)などで助監督を、宮崎政記監督の「よいお年を」(96年)などでプロデュースを手掛ける。2010年、「ただいま それぞれの居場所」を企画・製作・監督。文化庁映画賞文化記録映画大賞を受賞する。同じく企画・製作・監督を務めた「季節、めぐり それぞれの居場所」で、第36回山路ふみ子映画賞(山路ふみ子福祉賞)を受賞。その他監督作に、「9月11日」(10年)、「無常素描」(11年)、「長嶺ヤス子 裸足のフラメンコ」(13年)、「石川文洋を旅する」(14年)がある。

「映画『夜間もやってる保育園』」上映情報

東京・ポレポレ東中野にて上映中、ほか全国順次公開

高齢者の家庭内事故が急増中！？ 転倒を防ぐ対策とは

産経新聞 2017年10月7日

最も安らげる場所である自宅。しかしながら、実は家の敷地内で発生する事故が非常に多いことをご存じだろうか。特に、足腰の弱った高齢者にとって怖いのが「転倒」。骨折や、最悪の場合寝たきりになるのを防ぐため、専門家に危険な場所と対策について聞いてみた。

■高齢者が最もよく転ぶ場所とは

お話を伺ったのは、福祉用具のレンタルや住宅改修を手掛ける株式会社カンパニユラ代表取締役、磯貝一さん。「転倒の場合に限ると、最もリスクが高いのは庭。次いでリビング、玄関、階段です」(磯貝さん)

家庭内で転倒する場所というとなら階段が真っ先に思い浮かぶが、意外にも第4位。庭というだけでも驚きだが、8割は平面における転倒なのだとか。

「洗濯物を干している最中などに平面でつまずき、骨折などの怪我に繋がるケースが非常に多いです。私が実際に目撃したケースで言うと、掃き出し窓のご家庭で、庭に出るときにつまずいて転んでしまうことがとても多く見受けられました」(磯貝さん)

続いて、家族がくつろぐリビングでは、どのような危険があるのだろうか。

「リビングでは、カーペットなどの敷物を敷いているご家庭も多いですね。部屋一面に敷いてある場合は特に問題ないのですが、テーブルの下など一部に敷いてある場合、床との間に1cmほどのわずかな段差ができます。あと、敷物の端がめくれあがっている場合がありますので、こうした段差につまずいてしまうようです」(磯貝さん)

ほんのわずかな差でも、足腰の弱い人にとっては転倒する要因になってしまうとのこと。転んだ先に机があった場合、角に頭を打つなど、さらに被害が出る場合があるので注意しよう。

■加齢により明るさを感じにくくなる！？

玄関や階段の場合、明らかな段差があるのでイメージしやすい。特に階段では、お年寄りが自覚しにくいある要因が絡んでいるようだ。

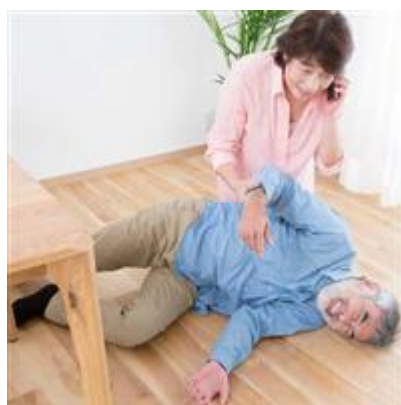
「年を重ねると、下半身の筋力が低下します。加えて、つま先が上がりづらくなるのも原因であると推察されます。実は、私たちが階段などちょっとした段差を上るとき、つま先は少し上に上がっているんです。しかし、高齢者の場合は上がりません。なので、つま先が引っかかって転倒しやすくなっているんですね。あと、高齢になると当然視力は低下しますが、実は明るさを吸収する能力も低下するんです。つまり、同じ明るさでも、若い人に比べて高齢の人は暗く感じているのです」(磯貝さん)

足元を暗く感じるにより、さらに転倒のリスクが高まるのだという。

■介護保険を利用すると、住宅改修費が支給される！

では、転倒を避けるための対策として、何をすればよいのだろうか。

「庭の場合なら、ステップや手すりをつける工事、敷石を撤去する工事が必要です。リビ



ングの場合なら、敷物を撤去するか、いっそ部屋の全面に敷いてしまうこと。玄関や階段も、手すりが無いなら、手すりをつける工事が必要です」(磯貝さん)

しかしながら、工事やリフォームとなるとお金が掛かるイメージで、なかなか踏み切れない人も多いと思うのだが……。

「その場合は、介護保険を利用しましょう。多くの方が誤解されていますが、介護保険とは介護が必要な状態になってから利用する制度ではなく、原則 40 歳になると必ず加入させられる強制保険です。要介護状態にならないための『予防』目的もあり、住宅改修費が最大 20 万円、そのうち 8~9 割が支給されます」(磯貝さん)

介護保険は、65 歳以上であれば「立ち上がりが不安定」といった軽度の人も対象となる。全くどこも問題のない元気な人は対象外だが、いずれにせよ申請が必要なので一度役所に相談してみよう。

ただ、どうしてもすぐに対策したい！という人は、ホームセンターの商品を購入するのがおすすめ。「例えば、階段には滑り止めのシートを全ての段に貼るとよいでしょう。日曜大工が得意な人なら簡単に取り付けられるような手すりも販売されていますので、安く済ませたい方は利用してみてもよいと思います」(磯貝さん)

便利なグッズはたくさんあるが、生活スタイルをガラッと変える必要はなく、あくまで現在の生活導線上に工夫を施すことがポイント。例えば、今まで素足で生活していた人が急に転倒防止用のスリッパを履き始めるなど、高齢者が新しいことを始めると慣れるまでに時間がかかり、それが怪我に繋がる可能性があるとのこと。気を付けよう。

なお、「教えて！goo」では「あなたは家の中で怪我をしたことはありますか？その場所は？」ということで皆さまの回答を募集中だ。

●取材協力：株式会社カンパニユラ (酒井理恵)

長女“揺さぶり死”事件の真相 カッとなる性格の問題か、男親ならではの事情か？

産経新聞 2017年10月8日

ぐったりしたわが子を抱きかかえ、駆けつけた救急隊員に助けを求める母親。その横で、男はただぼんやりと立ち尽くしていた。生後1カ月の長女、ひかりちゃんを揺さぶるなどの虐待を加えて死亡させたとして2日、警視庁に傷害致死容疑で逮捕された建築業、中馬(ちゅうまん)隼人容疑者(40)。ひかりちゃんの柔らかく小さな体に目立った傷はなかったが、肋骨(ろっこつ)が14本折れるほどの激しい暴行を受けていた。悲しい事件の背景には、「子供が苦手の上に激高しやすい」という中馬容疑者の性格に加え、母親よりも乳幼児の扱いに不慣れという男親特有の事情もあった可能性がある。

近隣住民「父親に違和感」

今年1月13日深夜。東京都町田市のマンションの窓を、救急車や消防車の赤いランプが照らしていた。「こんな夜中に、何があったのか」。住人らが見守る中、母親(26)に抱きかかえられてだらんと頭をうなだれたひかりちゃんは、ストレッチャーに乗せられ、救急隊から心肺蘇生(そせい)などの救命措置を受けていた。その様子を、父親の中馬容疑者は無言のまま、呆然(ぼうぜん)と見つめていたという。

「なんだか他人行儀な感じがして…。自分の子供だったらあんな態度はとれないはずだ」。近所の住人らは、中馬容疑者の態度に違和感を覚えていた。



超強度の揺さぶり

事件は、母親が入浴のためにベビーベッドを離れ、ひかりちゃんと中馬容疑者が2人きりになった約20分ほどの間に起きたとみられている。入浴前は元気に泣いていたひかりちゃんが、ベッドの上で動かなくなっているのを風呂から上がった母親が見つke、119番通報。自発呼吸ができなくなり、人工呼吸器をつけて入院していたひかりちゃんは、2カ月後の3月22日に肺炎で死亡した。

病院に搬送された際、ひかりちゃんは脳の広い範囲に血腫ができていた上、肋骨が14本折れるなどしていた。医師は「乳幼児揺さぶられ症候群（SBS）」の疑いがあると判断、「虐待の可能性はある」と警察に通報した。

捜査1課がSBSの専門家に確認したところ、乳幼児の場合、心臓マッサージなどで肋骨前部が骨折することはあるが、後背部も含め14本もの骨が折れることは揺さぶり以外では考えにくいという。

体格が良く、肉体労働に従事していた中馬容疑者。捜査幹部は「脇の下を両手で持ち、頭が激しく前後に揺れるぐらいの“超強度”の揺さぶりが行われた可能性がある」と指摘した。

中馬容疑者は逮捕容疑について「事実ではない」と否認しているという。

揺さぶり死、過去にも

SBSは揺さぶりにより、乳幼児の未発達で柔らかい脳が頭蓋骨に何度も打ち付けられ、傷つくことで生じる。嘔吐（おうと）やけいれん、意識障害などの症状のほか、最悪の場合死に至るケースもある。

超強度の揺さぶり

事件は、母親が入浴のためにベビーベッドを離れ、ひかりちゃんと中馬容疑者が2人きりになった約20分ほどの間に起きたとみられている。入浴前は元気に泣いていたひかりちゃんが、ベッドの上で動かなくなっているのを風呂から上がった母親が見つke、119番通報。自発呼吸ができなくなり、人工呼吸器をつけて入院していたひかりちゃんは、2カ月後の3月22日に肺炎で死亡した。

病院に搬送された際、ひかりちゃんは脳の広い範囲に血腫ができていた上、肋骨が14本折れるなどしていた。医師は「乳幼児揺さぶられ症候群（SBS）」の疑いがあると判断、「虐待の可能性はある」と警察に通報した。

捜査1課がSBSの専門家に確認したところ、乳幼児の場合、心臓マッサージなどで肋骨前部が骨折することはあるが、後背部も含め14本もの骨が折れることは揺さぶり以外では考えにくいという。

体格が良く、肉体労働に従事していた中馬容疑者。捜査幹部は「脇の下を両手で持ち、頭が激しく前後に揺れるぐらいの“超強度”の揺さぶりが行われた可能性がある」と指摘した。

中馬容疑者は逮捕容疑について「事実ではない」と否認しているという。

揺さぶり死、過去にも

SBSは揺さぶりにより、乳幼児の未発達で柔らかい脳が頭蓋骨に何度も打ち付けられ、傷つくことで生じる。嘔吐（おうと）やけいれん、意識障害などの症状のほか、最悪の場合死に至るケースもある。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

